

2023 年度

志摩和具潮かけ祭り 体験記

三重大学 人文学部 3～4 年生

吉村真衣（編）

はじめに

人文学部／海女研究センター 講師
吉村真衣

2023年7月18日（火）に、人文学部／海女研究センターの吉村と、吉村ゼミ所属の学生が志摩和具の潮かけ祭りを見学した。

本報告書は、学生による当日の体験記をまとめたものである。

私どもを暖かく迎えてくださった志摩和具の皆さまに心からお礼を申し上げたい。

活気にあふれる和具

人文学部 4 年 西川きらら

はじめに

三重県志摩市和具で行われる潮かけ祭りは、その名の通りに潮をかけ合う祭りである。その潮かけ祭りに 7 月 18 日に参加し、そこで見たこと、感じたことをそのままに、時系列に沿ってまとめたい。

神社にて

午前 8 時過ぎ、神事を見学するべく八雲神社へと向かった。神社に到着すると、奥の方から神社関係者の方々が出てくる様子が見えていた。想定していたよりも早く神事が行われていたようで、残念ながら今回神事を見学することはできなかった。しかし、「連絡くれれば〜！」と軽快に笑う神社関係者の方に、自然と笑みがこぼれた。

その後は、神社から漁港へ御神体を運ぶそうで、我々も着いて行った。いざ御神体を担ぎ出発、するかと思いきや、そのタイミングで漁港までのルートの確認。「(御神体を担いだまま…?!)」と少しの驚きもあったが、神社関係者の皆さんが、堅苦しすぎず、それでいて神事を大切に行っている様子が感じられ、とても貴重な場面を見ることができた。

まんど船へ

漁港へ運ばれた御神体は、船に乗って大島へと運ばれる。その御神体を乗せる船はまんど船と呼ばれていた。漁港に集まった人々の話で、「天気はいいけど波が高いから上陸できない」と口々に言っているのが聞こえた。大島に上陸できない場合は、船を大島に近づけ、そのまま船上で神事を行うといい、よくあることだと話していた。

神社関係者の方のご厚意で我々から大学生 2 名がまんど船に乗せていただけることになった。「御神体があるからそこまで濡れないよ」と誰かが教えてくれた記憶があるが、我々は後でその情報が真実でないことになる。まんど船はむしろ、潮かけの集中砲火に合っていたのだった。

大島へ向かう

10 時頃、大勢が船に乗り込み大島へと向かった。絶好の祭り日和の空の下、間近で見る和具の海があまりにも綺麗で、その風景を写真に収めていると、近くで「カシュッ」と音がした。1 人の男性がビールを手にして「開けたった！」と豪快に笑っている。船の中央に冷やしてあったビールを、待ちきれずに開けてしまった様子であった。和具の人たちは、豪快で笑顔の眩しい人が多く、見ているこちらまで元気を貰える。

やがて船は大島に近づき、船上で神事を行った。神事が終わると全員に飲み物が行き渡り、

おにぎりや卵焼き、ウインナーなどが入ったオードブルもいくつか配られた。乾杯の音頭でにぎやかに宴会が行われていった。私は人生初の船上での宴会に心躍らせ、オードブルもいただいてその時間を堪能していた。しばらくすると突然、冷たい水が降りかかってきた。「潮かけ始まったわ」「まだオードブル出とるのに」。口々に聞こえる声を頼りに、潮かけが始まったのだと分かった。近くにいた海女さんがオードブルの空いた器を持ちながら、「戦闘準備せな」と片付けており、そんな言い回しひとつにも和具の方のユーモアを感じられた。

いざ、潮かけ

潮かけが始まると、ロープを括りつけたバケツを海に投げ込んで海水を掬い、引き上げては互いに海水をかけ合っていた。中にはホースを使う人、大きな水鉄砲を使う人もおり、各々の潮かけ手段で楽しんでいた。初参加した私たち大学生 2 人も、始めは見様見真似でなんとか海水を汲んでいたが、何度も何度も繰り返すごとに汲み方が身についていき、バケツの中に汲める水量が増えていった。

潮のかけ合いは船対船だけでなく、同じ船上でかけ合うことも多かった。時には、なみなみと海水の入ったバケツを頭の上でひっくり返されることも。かけられては笑い、かけ返して笑い。近くに座っていた海女さんは、頭からバケツの水をかけられて「涼しいわ〜」と笑顔を浮かべていた。神社関係者の方々や志摩市長までも、容赦なく海水をかけられており、年齢も性別も役職も関係なく皆が無邪気に海水をかけ合う姿に、これぞまさしく無礼講だ、と初めての体験に感動した。

まんど船も周りの船も潮かけを続けながら、漁港へと戻っていった。その途中周りの船から別の船上の人へ向けて「かけたろかあ!」「やったれえ!」との声がしきりに飛び交っていた。これほどまでに豪快で、全力で挑むことのできる祭りを体験できることは、なかなかないことだろう。翌日の筋肉痛も恐れることなく、私もその場を全力で楽しんだ。

終わりに

潮かけ祭りに参加した感想として、まず一番は本当に楽しかった。初体験の潮かけももちろんのこと、和具の方々の元気を浴び、たくさんの海水を浴びて、元気をもらうことができた。唯一無二の体験をすることができ、非常に思い出に残る夏であった。

また、この日は天気が非常に良かったため相当に日焼けもしており、後日その日焼けのヒリつきを感じるたびに「潮かけ祭り、楽しかったなあ」と夏の記憶に思いを馳せた。

【参考資料】

志摩市観光協会公式サイト「潮かけ祭り」(<https://www.kanko-shima.com/event/5177/>、2023/2/20 閲覧)

潮かけ祭りの思い出

人文学部 3年 磯井香名

7月18日、志摩町和具で行われた潮かけ祭りに参加した。まんど船に乗れることになった時には、直前までどうするか悩んでいたが、きっと飛び込んだ方が楽しいと思い乗せてもらうことにした。なんと神事を行う、限られた人しか乗れない船だそう。神事に携わる方々や海女さん、市の関係者やメディア取材陣などが乗った船で、へりに座り、沖の方まで出ると、神事が始まった。本来は大島に上陸するらしいが、今日は波が荒くて上陸できないとのことだった。神事では玉串奉奠や祝詞の読み上げなどが粛々と進められていった。お供え物がブロッコリーとパプリカだったのが、イメージしていた神事と異なり印象的だった。

神事は滞りなく行われ、神主さんの祝詞のあと、御神酒を飲む段になる。すると、隣からどんどんビールが回されてきた。どうやら、乾杯を、御神酒を飲む代わりにするらしい。オードブルやお刺身なども準備され、これまたイメージしていた神事とのギャップに思わず笑みがこぼれた。そして、船の上で皆さんとビールを飲んでおつまみを頂く。お刺身は塩で味つけてあるらしく、まったく生臭くなくてとてもおいしかった。

みんながビールを飲み終わり、のんびりし始めたところで、上から冷たいものが降ってきた。飲み物を冷やしていた氷水である。冷たい！と騒いでいると、小さなバケツに縄をくくり付けたものが手渡される。これを海に垂らして直接海水を汲んでくるらしい。

いちど潮かけが始まってからは、もうめちゃくちゃだった。みんなが好き好きに水を掛けるので、対抗するように海水を汲んで周りに勢いよく掛ける。なかなか水の飛距離が伸びないと感じていると、同じ船に乗っていたおじさんが「そんな掛け方じゃあかんわ」と言って、うまい掛け方を教えてくれた。隣の様子を伺うと、海女さんたちが「私らはええわ」と座りながら、潮を掛けられて「気持ちええわ」と笑っていた。自分たちの船で存分に潮をかけあったあとは、船を少しずつ動かす。すると他の船が近づいてきて、今度は船同士で潮かけが始まる。海水を汲むホースを使って、すごいパワーの潮かけが行われていた。何艘もの船には、子供から高齢の方まで様々な年代の方たちが乗っていて、古いも若きも全力で潮を掛けて笑い合っていた。その楽しそうな雰囲気がとても良いと思った。

バケツを持ったまま歩いていると、近くの人にひょいと返されて自分が水浸しになる。左右を船に挟まれると、挟み撃ちされて逃げ場が無くなる。服の色は一瞬で変わり、終わったときには言われていた通り、全身ずぶぬれになった。でも本当に楽しくて、来年も来たいと思った。



当日の写真（撮影：吉村真衣）

「2023年度 志摩和具潮かけ祭り体験記」(2023年7月18日 於：志摩和具)

2023年8月31日

編集 吉村真衣(三重大学人文学部／伊勢志摩サテライト海女研究センター)

本報告書は海女研究センター事業「学生を通じた海女文化の研究・教育・情報発信」の成果です